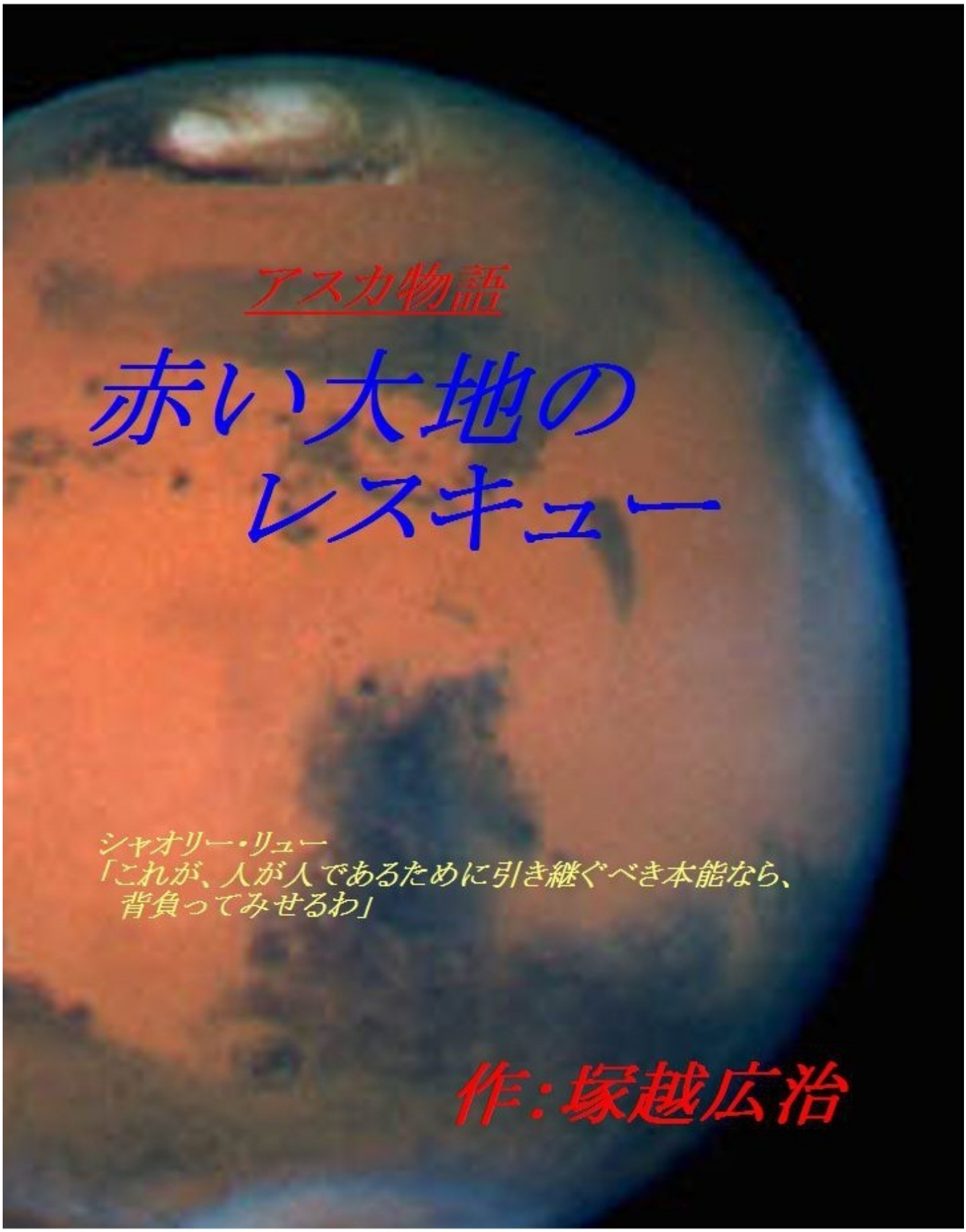

アスカ物語

赤い大地のレスキュー

シャオリー・リュー
「これが、人が人であるために引き継ぐべき本能なら、
背負ってみせるわ」

作：塚越広治

　貨客船ポセイドンの救助要請から、３７時間が経過した。情報不足が生み出す喧噪は沈静化しつつはあるが、状況は好転してはいない。未だに、８９人の乗客と１４人の乗員を乗せた質量３万トンの貨客船が、航行の自由を失って漂流しているのである。
　広大な太陽系の中、目的地まであと４日という火星を目前にした位置である。この貨客船にとって不幸な出来事だったのは、正体不明の物体に衝突されて推進剤タンクとエンジンに致命的な損傷を被ったことである。連邦軍基地アコンカグヤの近傍であった。軍が民間船に攻撃を加える益はなく、先日の戦闘で生じたデブリの一つが偶然に不幸な船を襲ったものと考えられた。しかし、関係を邪推されるのを危惧して、アコンカグヤは哀れな船に積極的な救援の手を差し伸べてはいない。
　ポセイドンの全長を貫く太い３本の支柱は、地球の海を旅する船の構造に例えて、竜骨と呼ばれている。長さ２００メートルに達する３本の竜骨が長さ２０メートルの細い支柱でつなぎ合わされて、巨大な三角柱となり、三角柱の側面の１つに搭乗員が居住し艦を操るためのするための管制モジュール設置され、その後方に乗客が居住する２つの居住モジュールが設置されている。三角柱の別の側面には巨大な円筒形の推進剤タンクと、この貨客船を航行させる核融合エンジンモジュール、残る１面にはこの艦が運版する貨物が詰まった２４基の貨物コンテナが固定されている。各種のモジュールを変更することで、高速・低速、貨物先、客船などに使い分ける多目的船として活用しうるのである。
 漂流するポセイドンに付き添うように航行する小型機があり、傷ついた親鳥を心配するひな鳥にも見える。ポセイドン号救出に先んじて、救助機動隊が火星衛星ダイモスから高加速で射出させた小型無人情報収集機である。その情報収集機の高解像度カメラには、煙を噴くエンジンモジュールの傷口が映し出されている。。
「運がいいのか、悪いのか、」
映像を見た救助機動隊のシャオリーが、救出に向かう救助艇内のコックピットでそう呟き、その呟きが別の救助艇で航行する２隻の部下にも伝わって、部下も頷くようにそう思った。
　映像を拡大すれば、エンジンモジュールの右斜め前方に直径２０センチばかりの穴が確認できる。その縁は高温で焼かれて変色している。高速で衝突したデブリの運動エネルギーの一部が、わずかな接触時間の間にそんな損傷を与えるほどの熱エネルギーを発生させたのである。そして、そのデブリはポセイドンの内蔵を食い破るように船体を貫いて、推進剤タンクに信じられないほど巨大な破口を生じさせていた。
「貫通射創‥‥‥」
と、３号艇のヨリコが、その状況を銃弾に貫かれた人体に例えた。幸運だったのは、貫通射創が居住区画を逸れたことである。居住モジュールを始め生命維持システムに損傷はない。乗客乗員に人的被害はない。
　シャオリーは得られた画像から役割を確認した。破壊されたエンジンモジュールと推進剤タンクを、竜骨が構成する三角柱から切り離して、船体を軽量化する。そして、彼女たちが牽引して

きた新たな小型エンジンモジュールを設置する。彼女たち救出チームの３隻で牽引してきたエンジンは推力がわずか５００トンばかりに過ぎないが、この貨客船を軌道を変え火星に送り届けるには十分に違いない。そして、彼女たちがその作業を終える頃に、高速で射出された推進剤タンクが届くはずだ。そのタンクを船体に固定し、推進剤を新たなエンジンに供給する。そういう役割である。
　シャオリーは自分の役割の手始めに貨客船との間に回線を開いて挨拶を交わした。
「ポセイドン号。聞こえますか。こちら第１４管区救助機動隊」
　彼女の言葉はポセイドン号船内放送を通じて乗客の乗る居住区にも広がった。透明な樹脂の窓から船外をのぞき込んで、見えもしない救援者を捜し求めていた幼女が、母親を振り仰いで笑顔を浮かべた。
「ママ」
（助けてくれる人たちがやって来た）ということを周囲の雰囲気から察して、不安げな母親に知らせたいと思ったに違いない。幼女の無邪気な笑顔と、傍らの若い母親の安堵のため息とともに漏れ出した笑顔が船客の気持ちを表していた。代表する艦長の声が届いた。
「ありがたい。このまま漂流して連邦軍に拿捕されるかと思っていた」
「運が悪かったね。その辺りは先日の戦闘でデブリ密度が高くなっている。その１つに衝突されたようだね」
「戦闘宙域はさけたつもりだったが、まさかデブリにとは思わなかった」
「ランデブー予定は３時間後。船体から重量物を切り離します。その後、新しいエンジンを設置するのに２時間。その間にカタパルトで射出された推進剤タンクが届くはずだ。タンクをエンジンに接続したら後は自力航行で帰れるよ。３日後には無事に火星の土を踏めるはずさ」
シャオリーは彼らを安心させるためにそう説明し、さらに付け加えた。
「約束するわ。必ず、救出する」
船長の音声に安堵と感謝の声音が感じ取れる。乗客のものと思われる歓声が重なって伝わってくる。数十時間にわたる不安と重圧から解放されたのである。シャオリーはヨリコとエヨロの二人の部下に宣言し、部下が応えた。
「さぁ、５時間で終わらせるよ」
「了解」
「了解」
しかし、３号艇のヨリコがふと不安を口にした。
「隊長。この付近を遊弋している連邦軍フリゲート艦の存在が気になりますけどね」
２号艇のエヨロも同様な不安を抱えている。
「そう、任務の終了まで連邦軍に邪魔をされなきゃ良いけど」
「私らはレスキューだよ。連邦軍も解放軍も、私らにゃ知ったこっちゃない」
３人が口をそろえて宣言した。
「救出任務の邪魔をする奴は吹っ飛ばす」
　彼女たち第三小隊の搭乗艇の船首には、導火線がついた爆発物のキャラクターが描かれているが、仲間が『発破屋』と称するのは、シャオリーの気性そのものを指している。

シャオリーはモニターにポセイドン号の情報を映し出した。船体の中央部付近に８つほど赤く輝く点があり、ｅ－４、ｅ－５と表示されている。本来は竜骨から切り離せるはずのエンジンが事故の影響で切り離せない。多少荒っぽい方法を使わねばなるまい。
「接合部は緑のポイント、全部で８箇所ね。ＬＡ－７爆薬を使うよ」
「爆破の震動に気づいたら乗客が不安がりませんか」
「大丈夫、一気に済ますわよ。乗客が不安がらないようにあやしといてよ」
（さすがね。）
もちろん爆薬など使い方を誤れば致命的な危険をもたらす。そんなものを自信を持って使いこなすとは、爆薬の取り扱いを教えた隊長の最初の夫は、若い妻になんと怪しげな教育を施したのだろう。シャオリーからの指示は続いていた。
「次にｅ－４ポイントが重心にも近い。ここと、後方のｅ－５ポイントにお荷物を固定する。図面からジョイントの長さを確認して調節しておいて」
「了解」
エヨロはモニターから必要なデーターを彼女たちが牽引するエンジンモジュールに送信した。わずかな振動が機体の外壁を通じて伝わってくる。新たなエンジンの支柱の長さと角度が竜骨の所定の位置にぴたりと当てはまるように自動的に調整された。
「ターゲットは近い。準備して」
二人の部下はそれぞれの機体の中でバイザーを閉じてヘルメットを密閉し、口をそろえて応じた。
「了解」
３人から口元の笑みが消えた。ここから先、彼女たちは船外活動に移る。体力を使うきつい作業である。ため息をつこうとした時に、シャオリーの救助艇のコックピットに緊急通信を示すランプが点滅した。
（司令部ね。今頃何を・・・・）
彼女の疑問はもっともである。現在、救援の指揮権は彼女にあり、遠く離れた司令部が介入することはないはずだ。
「こちら第三小隊、ただいま立て込んでるの。何かご用？・・・・・・えっ？」
僚艇のコックピットでは、今や船外活動を開始しようとしていた部下が、伝わってきた隊長の絶句に首を傾げた。シャオリーは受け取った命令を、表現を変えて確認した。
「不明瞭で聞き取れなかった。もう一度、言って」
３人は体制を維持したまま、司令部の返答を待った、こちらから発した通信がダイモス基地に届き、基地から返答が発せられてこちらに届くまで５分以上の時間を要する。
「繰り返します。任務は中止です。帰投して下さい」
「なんだって？　承服できない。ターゲットはすぐそこだよ」
　更に６分ばかり経過して、頑固な前線部隊に業を煮やすように、アフマド司令が通信に割り込んできた。
「小隊長。命令だ、帰投しろ」

「何故です？漂流者を見捨てて帰れとでも」
ポセイドンはすぐそこに迫っているのである。無駄にするには惜しすぎる時間が経過した。
「このままの航路を取れば、連邦軍の戦闘宙域に入る。人道的見地から彼らに救助を依頼した」
「火星市民の救助です。我々がやります」
ポセイドンも成り行きを見守るように沈黙を守っている。無言の６分が過ぎ、アフマド司令から次の指示が届き、シャオリーは即座に応答した。
「命令違反だぞ。降格ものだ」
「お小言と処罰は帰投してから受けます。我々はモジュール設置を続行します」
その後、届いた連絡は前線の彼女たちの行為をすべて打ち消すほど致命的なものだ。
「すでに推進剤タンクはこちらに回収した。エンジンを設置してもポセイドン号を帰還させることは出来ないぞ」
「推進剤が届かない？」
現場指揮官のシャオリーは歯を食いしばりながらも、救出中止を判断せざるを得ない。

第三小隊がダイモス基地に帰投するのに３日を要した。その間に第三小隊のメンバーが上官に発し続けた罵詈雑言は数知れず、基地内に充満するように響き渡っている。第三小隊の３人は、救助艇から降りた航宙服のまま、大股で司令部に向かった。３人には爆発しそうな雰囲気が溢れており、周囲の司令部要員はそれを避けるように道を開けた。唯一、通りかかったサンドラ・バーク第一小隊隊長が平然と言った。
「まだ、お怒りは収まっていないようだね」
　基地の要員には彼女たちの帰投と共に一波乱あるだろうという外れるはずのない予感があった。シャオリーはサンドラをちらりと一瞥して通り過ぎた。今はこの嫌みな女に彼女の怒りを分散させる気はない。彼女たちは挨拶もせず、荒っぽく司令室のドアをくぐったが、アフマド司令は意外にも肥満した体を椅子にとけ込ませるように、落ち着いた雰囲気で机にいた。シャオリーはこの数日間に溜め込んだ怒りを込めて、抱えていたヘルメットを投げつけた。
「あんたさえ、ちゃんと推進剤を届けてくれたら、救出できたんだ」
「しかし、君たちは小隊ごと連邦軍に拉致されていた可能性もあるぞ。部下を守った上司にもっと敬意を払ってくれても良さそうなもんだ」
「私たちの言いたいことは１つだけよ。いいかい、今度、あんな事をやったら、アンタのケツの下に発破を仕掛けてやるからね」
アフマド司令は肩をすくめて部下にアドバイスをした。
「そんなことより、しばらくは、世間から目立たないよう大人しくしくしていることだ」
シャオリーはそのアフマドの言葉の意味を、ニュースで知ることになった。
　ハンガー横の控え室に顔を出したシャオリーらを、サンドラ率いる第一小隊の面々が立ち上がって迎えた。シャオリーは時間を確認し、ライバルの小隊と敬礼を交わした。
「１４時００分。ただいま、第一小隊に当直勤務を引き継ぎます」
「第一小隊、ただいまより当直任務に当たります」
この儀式が形骸化して意味をなしていなかった。当直に当たる第一小隊は第三小隊の出動の間、出動に備えていた。彼女たちの勤務は、出動に備える当直、訓練や装備の整備点検、休暇に割り当てられている。しかし、本来は３小隊で編成されているはずの部隊は、その一部を引き抜かれ、勤務は変則的にならざるを得ない。疲れた体を充分に休める間もなく、次の出動に備えて救助艇の装備を整備しておかなくてはならないのである。
　サンドラは親指で部屋の隅にあるモニターを指して、この部屋に漂う雰囲気の説明に換えた。先ほどアフマド司令が世間から叩かれるのは覚悟しておけと示唆していたのはこれである。映し出されている艦に記憶がある。彼女たちが救出を断念せざるを得なかったポセイドン号である。戦況が膠着し静けさを保っているとはいえ、連邦政府と火星行政府は武力闘争中には違いない。連邦に保護された人々は人質ではないにせよ、火星に住む家族から切り離され、帰ってくるめどがない。ポセイドンに搭乗していた民間人が紹介され、火星市民の同情を誘った。何より、乗客の中に母親と共にいた幼い少女のプロフィールが涙を誘う。そして、火星に残された身内の人々

へインタビューのマイクが向けられた。
『ポセイドン号を救えたはずじゃないのか？』
『あの女たちは、私たちの家族を見捨てたの？』
『連中は連邦軍に尻尾を巻いて逃げ出したんだよ。』
市民の怒りや嘆きは行き場を失って、救出に失敗したシャオリーらに向けられているのである。コメンテーターのしたり顔がアップになり、マスコミは今回の一件のために作り出した責任者を断定した。
『我々マスコミも、取材を通じて今回の救助機動隊の行為には疑問の声を上げざるを得ません。もっと迅速で手際よければ救出ができたはずです。のろまな連中がドジを踏んでしまったというところですね。そとも危険から逃げ出した臆病者ということでしょうか』
　ガシャンっと音がして、部屋の中の人々の注意を引いた。シャオリーが椅子を振り上げてモニターを破壊しようとしたのである。その手首をサンドラがつかんで引き留めている。
「やめなさい。モニターを壊したって始まらない」
シャオリーはこの冷静な女と馬が合わない。しかし、この場合、サンドラの言い分に部がある。救出任務に失敗したという事実を背負って、シャオリーには弁解の余地はないように思われたのである。シャオリーは部屋を飛び出すように姿を消し、部下のヨリコとエヨロも続いた。
『では、次のニュースに移ります。本日、ソロモンドック社において豪華客船レニークラウディアが艤装を終え、正式に就航しました。』
（まだ、こんな船が。）
彼女はこのダイモス港で船の数が激減しているのを実感している。その状況で、数十万トンという大型の客船が、まだあったのかと考えたのである。彼女は皮肉に考え直した。疲弊の中の例外的な光明であるからこそ、マスコミたちも大げさに報道したがるに違いない。この時、部屋にブザーが鳴り響いて、当直を引き継いだばかりの第一小隊に緊急出動を知らせた。状況を知らせるアナウンスを待たず、彼女はハンガーに掛け出した。

救助艇の中、サンドラは忌々しげに呟いたが、その感情を誰に向けて良いか分からない。
「全く、、」
　現代の火星で社会の歪みが様々な形で吹き出している。それを感じつつ、その崩れかかった巨大な社会構造を語る言葉がない。火星独立闘争という言葉が、半ば期待感を込めて語られたのは、彼女たちの時間で２年以上も前のこと、地球時間では５年近い過去になる。偶発的に発生した戦闘が拡大した。陸戦兵力で敵の兵力を圧倒し、敵領地を占拠するという古来変わらない定石がこの時代にも通用した。しかし、地球と火星という隣の軌道でさえ、その大兵力を送るには遠すぎた。勝敗が定まらないまま火種が小惑星帯に飛び火した。小惑星帯に拠点を築き、小惑星帯とその外にある無尽蔵の資源を抱えた木星への航路を遮断し、互いの物資を枯渇させるという意図である。
　広がった戦域は海綿が海水を吸い取るように兵士の命を吸った。火星行政府は遠い戦場に送り出される兵士を、その社会から捻出しなければならない。壮年男性は社会から姿を消しつつあり、その影響は少年にまで及ぶ程である。行政府がサンドラたちを女性ながらレスキューという、危険な作業につけているのは、そういう理由である。しかし、サンドラの不安はその点ではない。船の不調が増えていることを実感しているのである。噂によれば、彼女たちが搭乗する救助艇のメインエンジンを組み立てているのは１５、６歳の学生だという。まだ子供ではないか。火星の人的資源はそこまで枯渇しているのである。彼女たちは成熟した社会の中枢部から、その体を支えていた骨格や筋肉をだましだまし抜き取った脆い仕組みの中に生存しているわけだった。
（たぶん、この船も）
　サンドラがそう思ったのは、彼女たちが救助に向かう貨物船アマゾンのことである。小惑星帯から火星に帰還する航路で、エンジンの核融合炉が暴走するという信じられないことが起きた。プログラムで安全性を制御された核融合炉を暴走に導いたのは、取り扱いに不慣れな船員たちが、誤ってエンジンを緊急用の手動操作に切り替えたあげく、推進剤をエンジンに送り込む高圧ポンプの操作ミスを重ねたことであった。多少なりとも操作に慣れた者なら起こすはずのないミスである。こういうトラブルが、火星の各地で社会の歪みから染み出すように起きているのである。サンドラはため息をつきつつ、無人偵察機から収集した映像を見て判断を下した。
「応急修理は不可能ね」
プラズマを制御する磁気コイルが溶融し、もはや宇宙船のエンジンとして役に立たない。緊急を要する負傷者はいち早く到着した無人機で火星へ搬送途中で、後はアマゾンに残る船員の救出のみである。幸い生命維持装置と居住区モジュールに被害はなく、搭載する貨物をパージして軽量化すれば、彼女たち３隻の救命艇で牽引して戻ることができるだろう。

　爆発が起きたのはこの時である。無人偵察機からの映像がアマゾンの船体中央の一点に輝きをとらえた次の瞬間には、救助機動隊ダイモス司令部のスクリーンが真っ白になり、直後に映像が途絶えた。司令部員がモニターから情報を解析して報告した。
「アマゾン船体中央に爆発確認。無人偵察機は爆発に巻き込まれた模様です」
司令室に緊張が走った。救援の目処が立ったと信じかけたところで、不意に起きたトラブルである。
「第一小隊。無事か、状況を報告しろ」
　司令室にシャオリーが顔を出した。声をかけようとしたアフマド司令に怒りの目を向けたので、彼はシャオリーがまだ怒りを解いていないのを知った。
「第一小隊より司令部へ。こちらは全艇無事です。アマゾンの映像を送ります」
通信が回復し、接近していた救助艇に備え付けられているカメラから映像が届いた。
「最初の事故で放熱板が損傷して居たからな。船内に核融合炉の廃熱が貯まっていた。推進剤タンクがその熱に耐えきれなかったんだ」
アフマドはそう分析し、続く指示を与えた。
「アマゾンからの通信が途絶えている。状況を報告しろ」
「爆発で前方船底が吹き飛んでいます。通信機能喪失している模様」
「生存者を確認せよ」
「居住区に生体反応確認。８名の乗員が生き残っています。負傷の程度は不明」
生存者が居る。その報告に司令部内に漂い始めた安堵感を打ち消す報告が届いた。
「待って、何か吹き出してるわ。居住区は酸素タンク１基を破損しています」
司令部に巨大なひび割れを生じたタンクの映像が届いた。司令部員が新たな情報をデーターベースに加えて次の最善の手を探した。スーパーコンピューターがはじき出した結論は、
『残る酸素と空気再生装置での乗員の生存可能期間、３６時間。』、『救助艇がアマゾンを牽引してダイモス基地から射出する酸素と医療物資を搭載する無人機とランデブーするまでに要する時間、４５時間。』、『８名の乗員の全員救助は不可能』、、『８人の乗員のうち、３名を選択し、救助艇で救出する方法を推奨します。』
「これだから、機械ってやつは」
はじきだされた結果を見た前線のサンドラから、そんな不満の声が届いた。彼女たちの救助艇は基本的には単座だが、コックピット後部の装備を投棄すれば、与圧区画に一人余分に搭乗することができる。救助機動隊の量子コンピューターは、第一小隊の３隻に要救助者を一人づつ乗せろと言うのである。もちろん、残りの５人の命は見捨てることになる。端末を操作して情報を集めていたシャオリーが言った。
「サンドラ、居住区画だけ船体から切り離して牽引なさい」
「できるようならやってるわ。居住モジュールが竜骨とほとんど一体で、爆破するほどの間隔が無いの」

居住モジュールを船体から切り離すことができれば、質量は８０トンぐらいになるだろう。彼女たちの救助艇と変わらない質量になる。当然、火星まで牽引する時間が大幅に短縮される。しかし、爆発の危険を秘めた船体に、支柱を爆破する衝撃を与えれば、巨大な爆発を誘発する恐れがあった。
「ＬＡ－７を容器から出して、カップ状に整形して。大きさはアンタのおっぱいぐらいで充分よ。中に雷管を入れるのを忘れないでね」
サンドラは察した。普段は爆薬として使うＬＡ－７が、高温の燃焼ガスを発生することを利用して、居住モジュールと船体を繋ぐ支柱を焼き切ってしまえと言うのである。
「なるほど。それなら衝撃も、」
と、納得しつつも背中に冷や汗が伝っている。こうしている間にも、アマゾンにはエンジンが発する余分な熱を蓄え続け、次の爆発が起きる危険を秘めているのである。

「いいかね、ウォーデン。我々にとって必要なのは、まず、臆病者だ」
ウォーデンの前でそう言い放った男は、その思想を実践することで、一介のレポーターからタルシスＴＶの放送局長に上り詰めた。先日のポセイドン号の件についても、事故が起きた原因を掘り下げてゆけば、問題は複雑で責任の追及は曖昧になる。ところが、ウォーデンは放送局長のアドバイスに従って救出部隊という臆病者を作り上げることで、意気消沈しがちな火星市民の団結を生み、なにより大事な視聴率というご褒美を稼ぎ出したのである。その手腕は認めざるを得ない。放送局長は続けた。
「しかし、物事にはメリハリが必要だ。臆病者だけでもいかん」
「今回は、アマゾンの爆発事故で、英雄を作り出せと？」
「疑うのか？せっかく仕入れたネタだぞ」
ウォーデンはネタの信憑性に首を傾げたわけではない。この上司が大物政治家と太いパイプを持って居ることは知っている。この報道ネタも、そのツテを利用して他の報道各社に先んじて入手したに違いない。口にしない不満を抱えた部下に、上司が語りかけた。
「いいか？俺の指示が会社の方針、火星市民を代表する意志だと思いたまえ」
「火星市民を代表する意志ですって？」
「大臣は俺の提案に乗ってきた。１０日後には火星軌道上で盛大なパレードだ。まず、膳立てにアマゾンで市民の雰囲気を盛り上げる。ウチの独占中継、君の一人舞台だぞ」
放送局長は中間管理職のシドニー・ウォーデンの目の前に餌をぶら下げたわけだった。
（英雄と臆病者を作るんだって？シドニー、失望したよ。いつからアンタはただの放送屋になっちまったんだ？）ウォーデンは、彼をファーストネームで呼ぶ古くからの仲間の冷たい視線を感じ取っていた。

　第一小隊の３隻が帰投しても格納庫は閑散とした雰囲気が否めない。人材不足の波は広大な宙域を守備範囲とする１４管区の救助機動隊にも押し寄せていて、臨時で抽出されたはずの第二小隊は、すっかり隣の管区に根を張って、戻される気配がないのである。機体と隊員が定数を満たしていないのはこの管区だけではないから文句を言う先がない。
「お疲れさん」
　シャオリーは帰投した仲間を機械油で黒く汚れた手をウェスで拭いながら迎えた。第一小隊の出動と共に彼女たちの休暇は取り消され、機体の整備をしつつ別の出動任務に備えて待機しているのである。いつもなら軽口や皮肉の飛び交う場面だが、椅子にかけた第一小隊の面々から人間らしい表情が抜け落ちている。命がけの緊張した任務を終えて放心状態になっているに違いない。帰投中の彼女たちに接触したタルシスＴＶの取材陣も結局この緊張状態から開放されきっていない第一小隊からコメントが取れずにいる。
「まったく、あんたらにファンレターの山が届きそうな騒ぎだったわ」
コメントは拾えなかったが、ウォーデンらが意図した視点で番組が編成され、今や第一小隊は命の危険にもひるまず８名の救出を成し遂げた英雄である。シャオリーは数時間前からとぎれることなく英雄の姿を報じるモニターを顎でしゃくって言った。
「私たち第三小隊の扱いとはずいぶん差があるじゃない」
そう言いつつ、シャオリーはサンドラの手を支えるように強く握った。無表情のサンドラの手が緊張で震えが止まらない。気丈な女に見えるが、こうしてみると普通の人間、普通の女と変わりがない。
　周囲をぐるりと見渡してシャオリーは叫ぶように言った。
「あぁーー、男が、欲しいわね」
その露骨な表現に周囲が息を飲み、ヨリコがかばうように言った。
「隊長。みんな、引いてますよ。誤解を招く言い方は避けたらどうです」
「か弱い女にレスキューをさせるより、男にやらせろってのよ」
「か弱い女性？。じゃあ、ワシのような年寄りをこきつかうつもりかい？」
と整備士のディクソンじいさんが応じた。すでに７０歳を超えるが、その年齢を感じさせない歯切れの良い口調と同じく、整備士としての腕は良い。彼女たちが救われるのはこのじいさんの温厚な人柄である。
「しょうがなかろう、戦争に取られて、後方は女と年寄りと子供ばかりだ」
　ブザーが鳴り、司令官の事務的な声がした。
「第一小隊隊長、第三小隊隊長は、至急、司令室まで」
こういう事務的な話し方をするときには、彼は腹に一物を抱えている。サンドラがそれを悟って露骨に嫌な表情をしたばかりではなく、舌打ちまでしたのをシャオリーは見逃さずニヤリと笑った。嫌みな女だが、命がけの任務を終えて帰投して、わずかな間に人間らしい表情が出るまで回復するとはたいしたものだ。

「質問は？」
アフマド司令は新たな命令を伝えるのに終始事務的な口調を崩さなかった。サンドラは肩をすくめて応じた。
「別に、」
「私も命令を拒否する理由は見つからないわ」
シャオリーが戸惑うように発する返答に、アフマド司令が司令官室のドアを指差した。
「では、二人とも任務に移りたまえ」
部屋の外で様子をうかがっていた二人の部下に、サンドラが短く言った。
「次は、第三小隊にもいい夢を見させてやるさ」
任務の直後で疲労し、今は、名誉や英雄の称号より休憩を取っておきたい。シャオリーはエヨロとヨリコに短く言った。
「我々、第三小隊がパレードの先導をすることになった」
　火星市民は小惑星帯での激戦のニュースは聞き知っていても、遙か彼方のことである。しかし、身近にフォボスやダイモスにの宇宙港に入港する船の数や、損傷修復のために帰投する船の姿から船橋が彼らにとって思わしくないことに気づき始めている。そこで、残存艦を集め派手なパレードを行って火星市民の士気高揚と戦時国債の拡売を計ろうというのである。その先導をダイモス港に拠点を置く第１４管区救助機動隊が引き受け、シャオリーが率いる第三小隊がその先導を勤めるというのである。
「その間、本来の任務は？」
「パレードとその準備期間中、隣の管区の連中が第一小隊をサポートする」
「借りを作っちまいましたね」
「しあさってから１０日間、我が第三小隊はパレードに備えてフォボス基地に移動する。明日と明後日は非番だ。久しぶりに帰って移動の準備をしておきなさい。では、解散」
部下を任務から解放した彼女は、未だ少し、格納庫での仕事が残っている。
「ディクソンじいさん。あのね、、、」
格納庫に足を運んだシャオリーは、救助艇の前で若い整備士を指導していたディクソンに声をかけた。振り返るディクソンに、シャオリーは言葉を詰まらせて口ごもり、傍らにしゃがみ込んで、ディクソンの指導で整備したエンジンを組み立てている整備士に次の部品を渡した。
「あのさ、、、」
シャオリーは再び口ごもった。ディクソンは若い生徒に取り付ける部品の角度を指先で指示しつつ、シャオリーに視線を向けた。気むずかしい顔で隠してはいるが、思いがけず受けた晴れやかな任務に、戸惑いと嬉しさで混乱しているのだろう。このまま黙って彼女の困惑ぶりを見ていても面白いと思いつつ、ディクソンは、渋々、腹の内を明かした。
「パレードのことか」
「そう、知っていたの？」

「まずは、休暇でゆっくり体を休めてこい。その間におまえさんたちの船はぴっかぴっかに磨き上げておいてやる。ほかには？」
「ありがと。用はそれだけよ」
拍子抜けしたように立ち上がって立ち去るシャオリーを若い整備士たちが見送った。

　状況が急変したのは、シャオリーら第三小隊のメンバーが任務から解放されてわずか３時間後である。司令室で普段は冷静なサンドラが珍しく怒り狂って上司の机を叩いた。
「私と私の隊じゃ、出来ないって言うの？」
「その通りだ。貨物船アマゾンの時を思い出せ。どちらが熟練しているかは君自身が知っているはずだ。この件は連中にやらせる」
サンドラには反論の言葉がない。アフマド司令は続けた。
「連中には私から連絡を取る。君たちはパレードの準備にフォボスに飛びたまえ」
「分かりました。第一小隊はパレードの先導任務でフォボス港に向かいます」
不機嫌な音を立ててドアを出て行くサンドラを見送ったアフマド司令は机の上の端末に呟くように言った。
「第三小隊隊長シャオリー・リューに繋いでくれ」
　ややあって、ディスプレイにシャオリーが映ったが、彼女は通信の相手を知ったとたんに露骨に嫌な表情を浮かべた。彼女は素肌に厚手のローブをまとっており、グリスの香りが漂いそうな髪や肌のままである。おそらく、今からシャワーを浴びて汗を流し、気持ちよく寝床に潜り込んで疲れを取ろうとしていたのだろう。アフマドは最悪のタイミングで部下の休暇を奪うにことになった訳である。シャオリーが口火を切った。
「非番の部下に、何のご用？嬉しいご用じゃなさそうね」
「レニークラウディアを知っているかね」
「今頃、私らにゃ縁のないお金持ちを乗せて、楽しい処女航海の最中さ。えっ？」
「察しが良いな。君たちの休暇は中止になりそうだ」
「どういうこと？」
「エンジントラブルで漂流中だ。連邦軍基地アコンカグヤ近傍という最悪の位置だ。漂流中のレニークラウディアから不要物を爆破切り離して身軽にした船体にエンジンを設置し、火星へ帰投させる軌道に乗せる。。出来るのは君たちだけだ」
シャオリーは考え込むように沈黙を守り、アフマドは説明を続けた。
「今は伏せてあるが、そのうちマスコミの連中が嗅ぎつけるだろう。大騒ぎになる前に準備を整えておきたい。ただし、断ってくれても良い。断っても誰も君を非難するものは無い。君の判断に、君と君の二人の部下の命がゆだねられる。断って得られるものは、パレードの先導という光栄な任務。受け入れて、得られるものは何もない」
「１つだけ、聞きたいことがある」
「何だ」
「先のポセイドン号がダメで、今回のレニークラウディアを救出する理由はなに？」
「私も先の一件では心を痛めていてね。レスキュー魂に目覚めたというところかな」
シャオリーは疑うように無言を保った。
「未だ何か？」

「まあいいわ」
「エンジンと推進剤の手配にあと６時間要する。その間にどちらか決断してくれ」
シャオリーはきっかり１時間後に司令部に姿を見せた。しかし、気持ちの良いシャワーと睡眠をじゃまされて機嫌は最悪である。
「どちらか決断してくれ？決まってるじゃない。パレードよ、パレード」
人道上の理由を掲げて救助を依頼すれば、連邦軍も目と鼻の先を漂流する民間人を見捨てやしない。そういう意味で彼女たちが出動する理由はないのである。ましてや、二人の部下の命を危険にさらすわけにはいかない。彼女は先の司令官の言葉を反芻した。
「断って得られるものは、パレードの先導という光栄な任務。受け入れて、得られるものは何もない」
　このとき、格納庫内の薄暗いライトの一つが、救命艇の柔らかな局面に反射して、シャオリーの目を射た。歳にして、１６、７かと思われる少年たちがディクソン整備士の元でシャオリーらの救助艇を磨き上げているのである。シャオリーは思った。
（あんたら、磨く船を間違えたわね。）
　パレードの先導の打ち合わせに第一小隊機は出動し、がらんと広い格納庫には第三小隊の三隻が残されているのみである。晴れやかな任務から遠ざけられ、ため息がつきたくなる光景だった。
「それにしても、」
格納庫の光景を寂しいといったのか、整備する少年たちをまだ子供だと言ったのか分からない。そんな声がシャオリーとディクソンの背後から聞こえた。二人が振り返るとエヨロの姿があった、頭部を覆う厚手のインナーが彼女の長い髪まで覆っていて、ヘルメットを着用すれば即座に出動できるという体制である。
「ヨリコは少し遅れるわ。休暇が中止になったことを家族に伝えてるから」
「あんたち、、、」
シャオリーが言葉を詰まらせた。休暇が中止になったこと、晴れやかな任務が一転して危険と苦労のみ多い任務になったことを伝えて招集しなければならない部下が、自らの意志と判断でここにいる。やや感激する場面を老整備士が茶化してのけた。彼女たちの視線の先にある少年たちをさして言った。
「皆、わしの孫みたいなもんだ。勝手にとって食うなよ」
彼女たちが男に飢えているのではないかと冗談を言ったのである。
「殴るよ、じいさん」
シャオリーが柔らかく握った拳でディクソンの胸を叩いて笑った。
「みんな『火星の息吹計画』も知らん年頃の連中だよ。わしも子供の頃だったからな、、、」
　その計画の名は、火星市民に語り次がれている。連邦政府の主張は火星の大地に巨大なエネルギーを注ぎ込んで地中の二酸化炭素を大気に放出させ、堅く凍り付いた水を溶かして大地を潤せば、テラフォーミングが数百年は進むということだった。しかしながら、計画に反対した火星市民の危惧は的中した。制御し切れずにあふれ出した二酸化炭素と水の濁流は何の利益ももたらさずに薄い大気と大地の裂け目に消えた。残されたものは、計画の基地となったシンカンサイ市

の破壊の爪痕と、救援を求める人々だけであった。助けを求めるのに地球は遠すぎる。火星の人々は自分たちを受け入れようとはしない頑固な大地の上で、夜空を振り仰いで感じたのである。
（この大地に生きる自分たちだけで、支え合うしかない。）
今、再建された都市の展望室の碑に刻まれた言葉がある。
『わすれないでください、わたしたちのこと。』
命を救われた人、命を救った人、この大地で生きる人々にそう言う思いが芽生えた事件である。
シャオリーはディクソンの言葉を礼の言葉で中断させた。
「ありがと、、、」
言葉にはしなくとも、この老人は生き方で思いを伝えてくれている。シャオリーはダイモス港の窓から見える火星を見て思った。
（いま、傷つき救いを求めて漂流している人たちがいる。でも、忘れないで欲しい、いま、ここに私が居ることを。）
彼女を突き動かす思いは心の底からわき出すような根源的なものらしい。
（これが、人が人であるために引き継ぐべき本能なら、背負ってみせるわ。）
民族や宗教や思想信条の違いなど、人の表面を飾り立て、人を区分けしていた衣服を剥ぎ取って生身の人間にしてしまえば、この火星に生きる人々になるのかもしれない。
　エンジンと推進剤タンクは予定から３時間遅れで到着した。社会的な混乱に加えてパレードの準備から生じる混乱を考えれば、推進剤を満載した大型エンジンがよく調達できたというべきだろう。そのエンジンの外部にシャオリーたちの３機の救命艇を固定し、エンジンから伸びる信号ケーブルをエヨロ機に接続しエヨロ機のコックピットからエンジンを操作できるようにセットする。その作業に３時間を要した。訓練を積んでいるとはいえ体力を消耗する。作業を終えてコックピットに戻り、与圧された小さな空間でヘルメットを脱いだ彼女たちは、インナーが吸いきれなかった顔の汗を拭った。シャオリーはくんっと鼻を鳴らして襟元を嗅いだ。シャワーを浴びようとしていた時に呼び出された、汗臭さが気になったのである。
（こんな事じゃ、あの坊やたちを誘うなんてできないね。）
　シャオリーはディクソンの孫たちを思い出してそんな冗談を言いかけた。冗談を言っておかないと寂しすぎる光景なのである。巨大なエンジンとタンクに目をやれば、彼女たちの数十トンの小型艇などコバンザメのごとく存在しないのと同然である。パレードに参加する大型艦がちらほら見える。どの艦も電飾のようにライトを煌々と点灯させている。その脇を牛が鋤を引くように、第三小隊が人知れずわびしく通り過ぎていく。
「賑やかなものね」
　シャオリーは自分たちの姿の侘びしさを自嘲的に笑った。自動モニターさせていた通信の中からセットしてあったキーワードに呼応してニュースが流れ始めた。
「ただ今、緊急のニュースが入りました。アコンカグヤ連邦軍基地近傍において、Ｎ＆Ｓ社所属の客船レニークラウディアがスペースデブリと思われる物体多数に衝突。損傷を負った模様です。なお、詳しい内容は発表があり次第番組中でお伝えします」
火星市民は、このニュースによって事故を知った。しかし、救出に向かう者が、こんな侘びしい

姿だとは思うまい。

　総合的な情報収集の観点と物資や人員の補給の面から、衛星ダイモスに拠点を置く１４管区司令部がシャオリーらの出動以降３日間、救出の指揮を執っていた。目標まであと４時間という距離で、司令部は現場のシャオリーに指揮を引き継いだ。無人偵察機による目標の被害状況の調査は終わりを告げ、接近しつつある連邦軍基地も今は平穏であるらしい。あとは現場指揮官が定められた手順に従って行動するのみである。
「こちら第三小隊、了解しました。以降、救出の指揮権を引き継ぎます」
　シャオリーの音声に呼応するように、突然に正体不明の若い男の声が割り込んだ。
「何？　あのドジで臆病な第三小隊か？」
　マスコミが彼女を揶揄したフレーズである。声の雰囲気では青年は二十歳過ぎ。そんな若い男が、シャオリーが一番聞きたくもない罵声を繰り返し浴びせた。
「なるほど、ポセイドン救出から逃げ出した連中か。道理で、救出がトロいわけだ」
「黙ってな、坊や。でないと、その尻、蹴飛ばすよ」
「なに、俺を誰だと思ってる」
「礼儀知らずの坊やだってことは分かるわよ」
「俺の親父は運輸交通大臣テイラー。俺はその一人息子だ」
アフマド司令の顔が浮かんだ。出動前のシャオリーの疑問が解けたのである。
（なるほど、狸親父が。大物政治家の馬鹿息子を救出して出世の点数を稼ぐつもりね。）
「さっさと救出を始めないと、親父にお前たちのことを罷免させてやる」
「あの馬鹿。あんな大出力で」
　エヨロがそう言ったのは的を得ている。坊やが発した強力な通信は、連邦軍基地でもキャッチしたに違いないのである。シャオリーは救出の初手を放った。
「艦長。その馬鹿を艦橋から追い出しておいて」
　シャオリーに言われるまでも無く、乗組員が坊やを羽交い絞めにして通信機から引き離す映像が届いた。艦長が坊やを怒鳴る声が伝わってきた。
「馬鹿者！　君は自分がやったことを分かっているのか？」
シャオリーは２号艇に指示を出した。
「ヨリコ。連邦軍の通常通信をモニターしておいて。変化があったら教えて頂戴」
　レニークラディアから艦橋の状況と艦長の声が伝わってくる。
「この近辺には連邦軍の艦艇が遊弋している。この船に政府高官の子息が乗っていると知られて見なさい。彼らは救出という合法的な名目で君を拉致しに来るぞ」
　坊やの青ざめる様子から、事の重大性の一端を理解したのがわかった。艦長は続けた。
「他の乗客まで巻き込まれて、この艦は拿捕され、乗客は皆、収容所暮しだ」
　その言葉は船員と乗客に共通する思いである。冷たい視線を浴びる坊やに艦長は続けた。
「君は、我々の安全を脅かし、救出に来てくれた連中の命を危険に晒したんだ」
　伝わってくる艦橋内部の映像から、逃げるように走り去る坊やの後ろ姿が消えた。しばらくは

、じゃまをする気はなくなったらしい。
「レニーとのランデブーコースに乗りました。減速して」
「レニークラウディアへ。出しゃばりなお客さんが来るまでに仕事を終えるわよ」
　敵対する勢力の軍の目と鼻の先である、シャオリーらの艇は救助機動隊の身分を明らかにする信号を自動発信している。しかし、彼女たちが搭乗するアスカという高機動艇は解放軍で攻撃艇として使用されている船で、それを口実に難癖をつければ彼女たちを拿捕することもできるに違いないのである。
「２号艇から隊長へ。暗号通信で内容は解読できませんが、連邦軍側の通信がずいぶん騒がしくなってます」
「２号艇そのまま、３号艇、船外活動の準備を始めて」
　シャオリーはエヨロにエンジンの運搬を継続、ヨリコにエンジンモジュールから艇を切り離して自分に続けと命じた。この時、弾んだ声が入った。
「レニークラウディアより救出チームへ。本船のエンジンモジュールの切り離しが可能になった。ダイエットしてレディ方をお迎えしたいが」
　被った損傷と共に本来は切り離せるエンジンや推進剤タンクが切り離せなくなっていた。その機能の修復に成功し、独自で重量物を切り離して船体を軽量化できるようになったというのである。
「助かる。そうしてくれ。こちらもまもなく視認距離にはいる」
　朗報だった。シャオリーらはエンジンモジュールを短時間で切り離すつもりで、爆薬ＬＡ―７を持参している。しかし、その切り離し作業には３時間を要するだろう。その時間が短縮できるのである。しかし、好いニュースばかりでもない。
「３号艇から隊長へ。連邦軍フリゲート艦をキャッチしました。接近しています」
「敵方の大臣の息子が目と鼻の先にいるとなればね。うんっ？」
　シャオリーはレニークラウディアから伝わる通信に異変を感じた。何やら慌ただしいのである。大型船を示すレーダーの輝点から小さな輝点が分離したのだが、新たな輝きは切り離されたエンジンモジュールではない。加速する様子がうかがえるのである。
「レニークラウディア。何かあったの？」
「馬鹿息子が救命艇で飛び出した」
「あの馬鹿。何処まで手間をかけさせるの」
「獲物が猟犬に怯えて、巣の方向を見失って走ってるようなものだわ」
ヨリコが救命艇の航跡をそう表した。レニークラウディア号と火星を結ぶ直線コース、距離は最短に見えるが、加速や減速で返って時間と推進剤を消費する。しかも、その後方にはるかに速度が大きなフリゲート艦がおり、のろまな獲物を追う猟犬の目の前にいるという状況である。
「隊長どうします？」
「我々の救出の対象はレニークラウディア号に搭乗するの善良な火星市民だよ」
「了解。さようなら、坊や」
「それに、あんなにエンジンをふかしてたらあっという間に漂流さ」
「連邦軍フリゲート接近しています」

「このままでは、作業中に交戦距離に入ります。拿捕される恐れが」
「坊やに役に立ってもらいましょう」
シャオリーは通信機の波長帯を調節した。
「救命艇に告ぐ。エンジンは切りなさい。その船はその中で救助を待つためのものです。内部で長期間の生存は可能ですが、長距離航行はできません。推進剤など３０分で空になるわよ」
「俺を誰だと思ってる。運輸交通大臣テイラー。俺はその一人息子だ」
（あらあら、、、操縦者の身分は連邦軍にも筒抜けよ。）
シャオリーの企みは成功し、エヨロがそれを裏付けた。
「隊長。猟犬は獲物に向けて進路を変えました」
「さあ、坊やが身を挺して囮になってくれているんだ。私たちも頑張らないとね」
「方位０ー４ー３。客船レニークラウディアを視認」

「くっそぉ。馬鹿女ども、応答しろ」
　救命艇の内部で坊やがわめき散らしているが、馬鹿女どもはこの救命艇との通信回線を切ってしまている。生まれてこの方、思い通りにならなかったことは一度もないという坊やである。全ては誰かが何とかしてくれる。その当然の権利が満たされない。怒り狂う坊やに、船外に出るための航宙服が目に入った。服が人型をしているということが、怒りの矛先を向ける動機になった。彼は緊急用に壁に設置された手斧をつかむと、呪いを込めて航宙服のヘルメットに振り下ろした。破壊の手応えが快感に変わり、１つ、２つ、３つ、全てを破壊し、やや怒りが収まってみると、この広大な空間の中にひとりぼっちで、自分を拉致する者が迫っているという恐怖と孤独感が湧いた。
「馬鹿女ども、さっさと俺を救出に来い。俺はな！」
わめく声が救命艇から最大出力で発信され続けているが、シャオリーらは巨大客船の救出に忙しくその暇がない。
「ｄ－１、ＯＫ。ｄ－２、ＯＫ。・・・・・」
「準備完了。ここまで２時間ね」
二人の部下の声を確認し終わったシャオリーはレニークラウディアの艦橋に語りかけた。
「エンジン設置完了。最終調整に移ります。軸線、＋０．３度、右、修正」
「調整完了。ヨリコ、、、アンカーボルト、打ち込んで、、、、」
声を発すると、けほっと空咳が出る、喉が息詰まるようにむず痒い。足場も無くふわふわと漂う不安定な宇宙空間で、巨大なエンジンを設置する作業に、無用な力が入り疲労する。ヘルメットの中は汗で生じる湿度を下げるために乾燥した空気が供給される。肌は汗で濡れているにもかかわらず乾燥した空気を吸わされ続ける喉は干からびているのである。レニークラウディアの中で作業を見守る人々は、彼女たちが疲労で言葉が少なくなっているのに気づいていた。
　レニークラウディア艦橋のレーダースクリーンでフリゲート艦がモニターされていた。その航路とエンジンの熱紋が解析され、肉眼では見えないフリゲート艦の所属と艦名まで表示されている。連邦軍アコンカグヤ基地所属、ワシントン級フリゲート艦、船名アトラス。アトラスは救命艇を追い、間もなく客船の脇を通り過ぎる体制にある。
「それにしても、あの坊やは、今頃、、、」
ヨリコに応じてエヨロは坊やの声音をまねた。
「俺は大臣の息子だぞ」
「連邦軍に聞き入れてもらえるといいんだけどね」
　ヨリコは作業の仕上げをするようにエンジンのケーブルを艦に繋いだ。様々な宇宙船の操作信号をやりとりをする共有コネクターは、宇宙船の操作信号を正常に伝えるだろう
「どう？」
艦橋内のスクリーンに艦の概略が表示されており、ノズル部分付近に様々な方向に矢印が点滅している。操舵士の操作に呼応している様子。

「ありがとう。完璧だ」
明るい返事がレスキューに届いた。任務が一段落したという安堵で、彼女たちの表情は本物の笑みを取り戻した。短い沈黙の中でシャオリーのヘルメットの中に部下の荒い息使いが伝わってきた。
「各自、自分の艇に戻りなさい。小休止を取ります」
　巨大客船の姿が遠ざかり、目視できるものがエンジンの噴炎のみになり、それすら視界から消えたとき、彼女たちは自分たちの大きさを実感した。
（なんて、ちっぽけなんでしょう）
精神的・肉体的疲労が抜ける間もなく、２０分が過ぎた。
「さて、、、、」
ため息をつくようなシャオリーに、エヨロが応えた。
「あとは、あの漂流中の坊やですね」
ヨリコが彼女たちの本心を吐露するように言った。
「私達が受けた任務はレニークラウディアの救出だわ。もう任務は果たしたわよ」
シャオリーは肩をすくめて、ヘルメットのバイザーを閉じ、船外でもう一仕事をこなす準備に入った。
「さあ、あんた達はブースター役をやって。エンジンを噴かせば連邦軍より先に可愛い坊やにたどりつけるわ」
「可愛い坊やねぇ、、」
「私らはブースター役ですか？」
２号艇と３号艇は姿勢を制御しつつ船体の下部分を併せるように、両艇の着陸脚を固定した。船外のシャオリーは自分の船の後部を２号艇と３号艇の船首でサンドイッチされるように導いて固定した。作業を終えて動き出したその光景は、シャオリーがブースターといった表現がよく分かる。後部の２隻はエンジンを目一杯噴かせている。その前方にシャオリー艇があり、彼女は推進剤を温存してエンジンを停止させたまま、部下の２隻でシャオリー艇を加速させているのである。
「坊やまであと１２０万キロメートル」
「二人とも、ご苦労さん。もう帰っていいわよ。ここから私一人で行く」
「隊長。推進剤の残量は気になりますが、エンジン停止のまま慣性航行で隊長の後を追えば、隊長が坊やの尻を叩いている頃には二人のところへたどり着けます」
「そう。私達にこのままの航路を維持させてください」
「だめよ。後方から連邦軍フリゲートがこちらに向かっている。あの坊やのために、あんんた達を危険には晒せないわ」
「でも、、、」
「命令よ。二人とも帰投しなさい」
ごんっ・・・と固い振動があり、エヨロとヨリコはシャオリーは自身の機体を彼女たちから切り離したことを知った。エンジンに点火して加速し遠ざかる隊長機を見送りつつ、二人は推進剤の残量計と向きあわざるを得ない。

（あと８５ｋｍ）
ショートレンジに切り替えたレーダーで距離を確認した。あと数分で漂流する救命艇が視認距離にはいる。シャオリーは今まで閉じていた救命艇との回線を開いた。
「救命艇内の坊やに告ぐ」
そう言いつつシート後方の貨物に目をやった。コンテナに「危険：ＬＡ－７爆薬」との記載がある。先ほどの救出で使わずに済んだ道具である。この荷物を投棄すれば人を一人乗せるスペースぐらいはできるはずだ。
「後に乗せて帰ってあげるわ。航宙服に着替えて、こちらに乗り移る準備をして待っていなさい」
坊やの返事がない。ややあって、とまどうようにぼそぼそと言い訳を語る声が小さく伝わり、シャオリーがあきれて叫んだ。
「はぁ？航宙服を破壊した？全部？何故？」
ちっと舌打ちをして考え込むシャオリーに、坊やの罵声が届いた。
「お前たちは、税金で無駄飯を食ってるのか。なんとかしろ」
「あんたが推進剤を使い果たしたのが悪いんでしょ」
「だから、そちらの推進剤をこっちに回せば良いんだ、馬鹿女め」
「お生憎さま、そちらのエンジンとは推進剤の規格が違うの」
　事実である。救命艇は柔らかな樹脂の中に核分裂物質の粒子を分散させた半固形状の推進剤を利用する。少量づつエンジンに送り込み、核融合物質の粒子を高エネルギーのレーザーで核爆発させる。それを短時間で連続的に行い、その爆圧を利用して進むのである。使い捨てに近いエンジンだが構造が単純で信頼性がある。
「しょうがない・・・・・」
シャオリーはヘルメットのバイザーを閉じ、嫌な船外活動の準備をした。まず、救命艇の着陸脚と彼女の救助艇の着陸脚を接合し、エンジン制御の信号ケーブルを引っ張り出して救助艇につないだ。これでシャオリーの艇から救命艇のエンジンが操作できるのである。
「エンジンの噴射方向は制御できそうね。じゃあ自動プログラムに切り替え、目標入力」
「ババアっ、何をしてるんだ。さっさと救出しろよ。役たたずめ」
シャオリーは声音を下げ脅すように含み笑いを込めて言った。
「この先はオフレコで頼むよ。実は、私はＬＡ－７をこんな風に使うのは初めてなのよ。使い方を間違えると、ねっ？、、、、」
　そして、坊やの乗る救命艇の通信アンテナを蹴り飛ばして破壊した。これ以上の罵詈雑言を聞く気はなかった。彼女は樹脂製の袋からＬＡ－７を救命艇の推進剤タンクに絞り出した。この火薬に点火するだけなら、救命艇の蓄電池に残された電力で十分だろう。続いてシャオリーは水のタンクについたポンプから伸びるフレックスパイプのジョイントをエンジンに繋いだ。この水はＬＡ－７が爆発の時に発生する高温で蒸気になる。ＬＡ－７の爆風と高圧蒸気になった水が救命艇に多少の推進力を与えるだろう。微々たる推進力だが、３００ｋｇのＬＡ－７と３トンの水は

、この船の軌道を修正するぐらいはできるだろう。
「これでよしっ」
　ふわふわと足場の定まらない空間で無理な姿勢を利続ける力作業は体力を消耗する。密閉されたヘルメットの中に彼女の荒い息づかいが響いている。その息づかいに突然に警告音が混じり込んだ。救助艇がキャッチした情報が彼女のヘルメットのバイザーに表示された。連邦軍フリゲートが接近したという情報である。作業中の救命艇に遮られて見えないが、まもなく連邦軍フリゲートが視認できる距離になる。彼女はそのまま作業を続けた。突然、帰投を命じたエヨロからの通信が響いた。
「隊長、気をつけて。フリゲート艦から正体不明の飛翔体が高速で接近します」
「クラスターだわ。救命艇のカバーに入ります」
「クラスター？エヨロ、ヨリコ、回避なさい」
　シャオリーは部下が命令を無視して現れたことより、突然の部下の意図を悟って警告をしたが無駄である。救命艇に遮られて直接に見る事はできないが、救命艇の向こうでピカリと輝きを発するものがあり、クラスターだというヨリコの判断を裏付けた。クラスターはターゲットの前方で爆発させ、弾片をばらまく兵器である。高速ですれ違う小型船をその弾片に衝突させるのである。小さな破片とはいえ、小型船が秒速数十キロから数百キロという相対速度でぶつかれば致命的な損傷を被るのである。二人の部下はクラスターの弾片から救命艇との間に割り込むために加速した。一瞬、流れ星に見えて、シャオリーの傍らを通り過ぎたものは、部下の救助艇のエンジンのプラズマの噴流だったに違いない。目標に向かって加速していただけに、弾片から被った被害も大きいはずだ。
「エヨロ、ヨリコ。無事かい」
　雑音の後、通信機能が回復したらしい。二人から現状報告が入った。
「３号艇、船首全壊、コックピットの中は警告ランプだらけ。でも、まだいけます」
「こちら２号艇、放熱板と探査機アンテナが吹き飛びました。自力帰投は可能です」
　シャオリーは救命艇の表面に足場と手がかりを探りつつ体を移動させて、自らの１号艇の傍らにたどり着いた。部下が盾になりきれなかった弾片で彼女の艇が傷ついているばかりではなく、視界の先の部下の優美な曲線で覆われた艇体のあちこちに酷い傷口が見られる。もともと危険な任務に使う船だけに、わずかながら装甲と防御システムがあり、致命傷は免れている。そして、その２つの盾からはみ出すように迫り来る連邦軍フリゲート艦の姿が見えていた。シャオリーは自らの船を経由して通信を送った。
「接近中の連邦軍フリゲートに告ぐ。救助作業の妨害行為は宇宙航行法第２８条２項により禁止されている。即刻、妨害行為を停止しなさい！」
　シャオリーを苛立たせているのはフリゲート艦が無言のまま彼女を押しつぶすような存在感で接近することである。今やシャオリーの視界を遮る距離にいる。陸戦隊を送り込むこともできる距離だが、そうすれば明らかな救助活動の妨害になる。彼らはそれを避け、無言の圧力を加えて野良猫を追い払うようにシャオリーを遠ざけるつもりなのである。
「私たちを追っ払おうっていうの。上等だわ」
にやりと笑う彼女の口元に八重歯が覗いた。彼女がこういう笑い方をすると狼の牙のように見え

ることがある。

　シルチス市中央公園に臨時で設けられた巨大スクリーンがあり、工員や、祭りの準備をする人々に混じって、祭りに期待をふくらませる家族連れの姿で賑わっている。タルシスＴＶのウォーデンらは中継準備を終え、数多いモニターでそんな映像を眺めている。
「市民公園中央広場から、ポール・カニンガムがお伝えします」
ウォーデンの合図で部下が当日の試験を兼ねたレポートを始めた。カメラは巨大スクリーンにポール・カニンガムの姿を映し出す。
「３日後に予定される、軌道上の艦隊大パレードに合わせて、こちら市民中央公園でも、、」
（うんっ？）
ウォーデンはモニターの一つに着目した。人々をかき分けるように歩く驕慢な風体の一団がある。パレードの実行委員長、中継の主体となるタルシスＴＶの放送局長、その二人に挟まれた中央の人物に見覚えがある。モニターを指さすウォーデンにクルーも同意して頷き巨大スクリーンの映像を切り替えた。
「ポール。おまえの右手後ろにアジェンデ軍事大臣がいる。コメントが拾えるか？」
ウォーデンがそう指示をした次の瞬間、本社報道部が割り込んだ。アジェンデ軍事大臣の姿はかき消され、本社のアナウンサーの上半身が映し出された。
「ただいま入りました緊急ニュースを申し上げます。レニークラウディア救出に当たっていたレスキューチームが連邦軍フリゲート艦との交戦距離に入りました。非武装の我がレスキューチームは攻撃を受け損傷。現在も両者のにらみ合いが続いている模様です」
突然のニュースに広場にいる人々は大型モニターに目を向けた。配信される内容は火星の全土広がっており、市民たちの注目を集めているはずだ。
（絵になりにくいが）
ウォーデンが面白いネタだと思いつつ不満に思ったのは、現場のレスキューが映像をこちらに届ける手段を持っておらず、伝わってくるモノが音声のみだからである。しかし、だからこそ危機が聞いている者に伝わってくる。２号艇のエヨロの声が彼女の姿のないまま火星全土に流れた。
「フリゲート艦アトラスへ。この空間の状況はモニターされ、状況は証拠として全波長帯で発信されています。救助活動の妨害行為を続けるならば戦争犯罪として弾劾の対象となりますが、いかが？」
（連邦軍の音声は？）
とウォーデンらは思ったが、対するフリゲート艦は沈黙を守っているらしい、伝わってくる音声はレスキューチームのものと推測されるものだけである。
「分からず屋め。ヨリコ、エヨロ、救助活動を続行します。ちょっと其処をどいてくれる？」
「あら、連邦軍フリゲートさん、こっちの艦の進路を変えるんだけど、そんな所にいると危ないわよ」
　その音声の直後、爆発音が通信を発する船体の振動音として伝わってきた。広場の人々は爆発音に驚いたが、その正体が分からない。アナウンサーが状況を推測で補った。

「大きな振動と異常音です。爆発音のようにも聞こえます。攻撃を受けたのでしょうか。わがレスキューチームの安否が心配されます」
　相変わらず連邦軍フリゲート艦は沈黙を守っているが、無言で圧力を加え続けるアトラスに業をにやしたシャオリーがイタズラ小僧に語りかけるように言った。
「なあに？貴方たちはクラスターで私たちを傷つけた。そのいい訳でも考えてるの？」
「私たちから攻撃を受けるとでも？こんな武器も持たない優しいお姉さんたちから？」
「でも、クラスターなんて、ふとしたイタズラだったのよね。だから今回は見逃してあげる。だから、さっさとお家にお帰んなさい」
語りかける言葉に応答はなく、女の声は苛立ちを増している。
この火星の大地の人々は彼女の声に耳を澄ませ、彼女の感情に触れるように接した。。
「何よ！、連邦軍とか解放軍とか、武力とか権力とか政治とか、あぁーーうっとおしい。
私が、いま、ここに居る理由、それは私が余計なモノを脱ぎ捨てた人間そのものだからよ。そんな人間の性根に、武器の脅しが通用するって思ってるの、ばぁーーか。ふゃチン野郎」
　その後、シャオリーの口から聞くに堪えない放送禁止用語が続け様に放たれたため、中継は切り替えられ、放送の指揮権は現場のウォーデンの手元に押しつけられた。ウォーデンは広場でマイクを持つポールにその後の役割を押しつけた。
「我がレスキューチームはどうやら無事なようです。続いては、、、市民広場に視察に見えられたアジェンデ軍事大臣にパレードについて伺いました」
　火星の民衆は事の次第を最後まで見届けることなく大臣のメッセージを押しつけられた。この報道枠はウォーデンに与えられた時間といっても良い。しかし、報道という観点から見れば、大臣というネタより、あの女どもの方が遙かに面白みがある。

　シャオリーは盾となっていた部下を移動させ、試験運転代わりにエンジンノズルから最初の一噴射をアトラスに向けて浴びせた。スカンクが自分を狙う狐に反撃をするのに似ている。反撃にも関わらず、シャオリーたちの目の前では、数十万トンという巨大なフリゲート艦は慣性航行で接近している。時折、艦のあちこちで明滅しているのは、姿勢制御ノズルから漏れるプラズマである。彼女は救命艇に仁王立ちになって、静かに接近を図るフリゲート艦を睨み付けた。静かな沈黙が続いている、しかし、その静かさの中の緊張感が和らいでいる。いま、艦橋に灯る明かりに人影が判別できる距離である。シャオリーはその数を数えた。小窓から見える人影らしきものも含めれば数十人になる。
（あんたらは、そんな大勢で私たちをなぶり殺しにするつもり？）
そんな彼らから通信が届いた。
『勇敢なお嬢様方、お姿を拝見し、お怪我が無いのを確認して安心しました。我々は出直します。デートのお誘いは機会を改めて。発：連邦軍フリケート艦アトラス』
　艦橋に詰める人影に変化が現れた。表情まで判別することはできない。しかし、窓辺から見える兵士たちの姿は、連邦軍の服務規程にでも載っていそうなきまじめな敬礼の姿勢である。その姿勢に嘘はない証拠に、フリゲート艦は船首のノズルからプラズマの排気を吹き出しつつ後ずさりするように彼女たちから距離を置いた。
「ふっざけた通信ね」
そう言いつつ、シャオリーは右手の中指を立てて遠ざかっていくフリゲート艦を見送ったが、悪い気はしない。競争で言えば彼女たちの勝ちだ、彼らは負けを認めて、この坊やの捕獲から手を引くというのである。緊張の糸が解けてどっと疲れと冷や汗が出た。重力があれば救命艇上にへたり込んで居たろう。シャオリーは１号艇のコックピットに戻り、与圧を確認後、ヘルメットのバイザーを開け、ほっと力を抜いて言った。
「さぁ、帰りましょう」
　彼女たちはエンジンを始動し、広大な空間にぽつりと３つのプラズマの明かりが灯った。
「静かね。坊やは泣き疲れて、眠っちゃったのかしら」
「いや。声が聞こえないだけ、ヤワなアンテナでね、作業中に壊れちゃったのよ」
「隊長。私、思うんですけど、救命艇に仕掛けたＬＡ－７は、連続的に燃焼させて燃焼ガスと水蒸気を噴出させても軌道制御ぐらい出来ると思うんですけど、」
シャオリーは含み笑いをした。
「だって、音をさせる方が、素直な良い子になれるわよ」
　救命艇の内部ではシャオリーの想像通り、坊やが怯えきって縮こまっていた。燃焼が続けざまに起きれば通常のエンジンの轟音だが、燃焼と熱による水蒸気の膨張が間歇的に起きるために爆発音に聞こえる。
「火星に着くまで５日はかかるでしょ。レディに対して、ババア呼ばわりしたのを反省する時間には充分ね」

　シャオリーはババア呼ばわりされたことを覚えていた。爆発の都度、救命艇は後方から押されるように、進路をわずかづつ変えている。もともと現在の火星の座標に真っ直ぐに向いていた運動ベクトルを、本来の帰還軌道に向けているのである。
「さあ、坊やより自分達の心配をなさい。どの艇体も坊やの救命艇よりずっとぼろぼろなんだからね。坊やより一足先に帰らせてもらいましょう」
　シャオリーの言葉通り、３隻とも、どこかに大きな損傷を負っているのである。３隻の船と任務を終えて疲れきった彼女たちを全天の輝きが包んでいる。
「ああっ、ややこしい人間さえいなけりゃ、なんて綺麗な星々」
　帰投までのわずかな時間が、彼女たちに与えられた安らぎの時間なのである。

　ふんっと、ウォーデンは不満気に鼻を鳴らした。確かに、首都シルチスの中央広場は数十万人という人を収容する能力があり、人々を取材し放送するというのなら絶好の場所に違いない。しかし、火星軌道上で行われるパレードを中継し、人々に伝えるならば、衛星フォボスかダイモスに中継基地を置くべきだろう。そういう単純な疑問である。その彼の疑問が解けた。スケジュール表の最後あたりに、１９時２３分アジェンデ大臣、会場到着という言葉に始まって、賓客席に着席する時間、スピーチ開始時間まで詳細に記載されており、大臣のスピーチの直後に広場に集まった人々が一斉に拍手を送る場面で番組を終了する。そういう放送スケジュールだった。次期首相とも目される政治家にスポットライトを当てる。ウォーデンはそんな役割を背負わされているわけである。
「ふにゃチン野郎共が、、」
　ウォーデンは政治権力に屈した上司たちを、あの第三小隊の隊長の言葉を使って小さく罵った。その後、３日を経過しても、機動救助隊司令部から第三小隊に関わる発表はなく、あの興味深い女たちの消息は分からない。しかし、チームは無事航行しているようだ。
「ウォーデンさん、」
チームの一人が指さすモニターの一つに、今もまた視聴者から第三小隊の問い合わせがあったことを伝えている。先の放送を聞いた視聴者から電話やメールで第三小隊の安否を問う問い合わせがあるのだが、ウォーデンらも報じるにそのネタがない。機動救助隊司令部もまた、パレードを盛り上げ、政治家を讃えるのに全力を投入せねばならないというわけである。
　まもなく火星衛星軌道上のパレードが始まる。建物の中の講堂に大きなスクリーンがあり、パレードの実行委員会の面々が顔をそろえて推移を見守っている。連なる席の末席にアフマド救助機動隊司令、タルシスＴＶ放送局長の姿が並んでいる。放送局長が大臣にすり寄った。
「では、予定通り、パレードの最後に先生の演説で盛り上げていただくということで」
「わしが、このパレードの主役ということか」
「左様です」

「パレードがまもなく始まる頃ですね」
エヨロの言葉に、シャオリーは話題を変えた。その言葉は聞きたくはない。
「全く、基本から再訓練ものだね」
　彼女たちは訓練校の初期過程で、誰かを救出するために自分自身が危険に陥ってはならないと教えれらた。責任を持って確実に救出するためには激情に身を任せてはならないという、常に冷静さを要求する指導である。ところが、彼女の船艇は赤や黄色の警告ランプを点滅させ故障と損傷を主張している。僚機の状況も同様である。推進剤の残量計はイエローゾーンを切りレッドゾーンを示して、もはや、ダイモス基地への帰投に最低限の余力を残すのみである。にもかかわらず、彼女たちの表情が明るい。拳の親指を横向きにのばして目の前にかざすと、火星がその親指からはみ出すほど大きい。よろよろと這いずりながら、ようやく故郷にたどり着くのである。
「よかった、あの女の助けを借りずに済みそう」
　救出を任務とする彼女たちが、人々の耳目を集めながら、同僚に救出されてのろのろと牽かれていくというのは絶対に避けたいことだった。ましてや、推進剤不足という初歩的な理由なら、あの嫌みな女の皮肉にも磨きがかかろうというモノだ。
「私は、デートをすっぽかしたまんま。なにか埋め合わせをしてやんなきゃ」
「私、休暇が取れるなら家族の顔を見に帰りたいわ。隊長は？」
「私かい？　私はね、、、、、」
したいこと、すべきことは何だろう。シャオリーは、良く分からない。
　そんなくつろいだ彼女たちに緊急通信が入った、アフマド司令の声である。
「第三小隊。君たちに、航路変更を要請する。前方の宙域を迂回して帰投せよ」
「なぜですか？」
アフマド司令がやや口ごもる様子を見せたのでシャオリーがたたみ掛けた。
「我々の艇は損傷しています。現在の航路を維持して帰らせて」
「損傷？だから拙いのだ」

　第一小隊サンドラは、僚機に距離を詰め、編隊を整えるように命じた。大小、型は違うが数十隻にわたる大型艦が、先導役の彼女たちと歩調を合わせ予定のコースに乗って足並みをそろえた。ここ数ヶ月の間、これほどの大型艦がそろうことはなく、たしかに、軍人や政治家がもくろむ士気高揚という目的を果たすかとも感じられた。その先頭に立つというのは、そんな任務を望みはしなかったにせよ、その時を迎えてみると誇らしい。彼女は彼女に続く数十隻の艦艇に通信を送った。
「航路、速度、変更ありません。ただいまスタート位置を通過、パレード開始です」
　その彼女が眉をひそめたのは、レスキュー用の波長で第三小隊の通信を受信したことである。ピンッと警告音がして、彼女にも指令から通信が届いたのだが、音声ではなく文字で送信するところになにやら含むところが感じられる。各艦にレスキュー用の波長の通信をモニターさせろと言うのである。
（あの狸親父が、また、何か悪巧みでも・・・・）
サンドラはそう思いつつ指示に従った。
「後続の各艦へ。通信波長をレスキュー用波長に合わせてください」
各艦にシャオリーらの会話が伝わり、その会話は、全艦の船内各所に広がった。
「損傷？だから拙いのだ」
「もう一度、要請します。僚艇の推進剤は残り少なく、わが小隊は全て中破以上の損傷を負っています。最短航路で帰投させてください」
「君達の航路はパレードの航路に接近する。もし、万が一、パレードを伝える映像に損傷を蒙った君たちの機体が映し出されてみろ、市民の士気高揚は台無しだ」
「火星市民の士気が挫けると？」
「その通り、アジェンデ大臣が気にかけておられる」
　大臣の肩書きはともかく、火星市民という言葉を出されては、彼女たちの立場を主張するすべがない。シャオリーは食いしばった歯の間から部下への指示をはき出した。
「了解・・・・。ヨリコ、エヨロ、あと二時間ほど道草を食うよ」
「大臣、ご指示通り、取りはからいました」
「結構。バレードの締めくくりは、心を揺さぶる私のスピーチで終えたいものだな」
　パレードに参加している人々は、救助機動隊が会話をモニターさせた意図を察し始めている。それぞれの艦の乗組員たちは艦長の次の判断を仰ぐように艦長に視線を送った。
広場ではアフマド指令が大臣を煽ておもねるように言った。
「一般民衆を導く者は、本物の英雄でなくてはならないということですな」
「その通り、本物の英雄によって先導されるのだ」
アフマド司令がいつもの抑揚のない声で部下に念を押した。
「聞いたか？サンドラ。本物の英雄に先導させろとのご指示だ。直ちに前線で指示を徹底したまえ」

（あの狸親父が、たまには真面目に仕事をする。）
サンドラはそう思いながら即座に指示に呼応した。
「後続の各艦へ。最高指揮官から新たな指示が出たわよ。あなた方は英雄に先導されるの。本当の英雄が誰か、分かってるわね？」
やや間をおいたが、サンドラの言葉を受け入れるように、彼女に続く各艦からの返信が、静かに、しかし、次々と届き始めた。
「了解した」
同じ内容が数十隻の艦艇から届き続け、異なるものがない。
「では、新たな航路に誘導します。ついて来て」
　サンドラは船首を翻し航路を変えた。彼女に付き従う艦艇も隊列を保ったまま、姿勢制御ノズルから静かにプラズマの尾を引いた。

　シルチス市市民広場に設置されたパレード実行委員会事務局メンバー達が大慌てで騒がしい。気づかずにいた僅かな綻びが拡大し、修復の方法すら分からない。出すべき指示にも迷ったパレード実行委員会会長がわめき散らした。
「どうした？　パレードの航路がめちゃくちゃだぞ」
アジェンテ大臣は演説の草稿を叩きながら怒鳴った。
「わしのスピーチはどうなる！！先頭にいる君の部下は何処へ行くつもりだ」
　アフマドは何か手違いでもあったのかと肩をすくめて見せただけである。ウォーデンの上司たる放送局長は突然の状況の変化にあわてふためいて指示を出すどころではなさそうだ。ウォーデンは首輪を放たれた飼い犬の喜びを実感した。
（面白くなりそうだ。）
ウォーデンの勘が何かをそそのかすようにそう語りかけている。ウォーデンはパレードに併走するＴＶ中継艇の部下との間に回線を開いた。
「中継艇のハンムル、聞こえるか？こちらは面白くなりそうだ。現場は任せた。こっちのふにゃチン野郎どもに最高ぉの絵を送ってこい」
　シャオリーが知れば顔をしかめるに違いない。ふにゃチン野郎というキーワードで現場のハンムルは撮影対象の人物を察して、にやりと笑って返答をよこした。
「了解。艇を加速させれば２０分でターゲットの撮影位置にたどり着けます」
ウォーデンは市民広場の部下のマーニーに次の指示を出した。
「マーニー。連中の波長をモニターしてスクリーンの映像と同調させろ」
（俺の部下は察しが良い）
ウォーデンはそう思った。音声係のマーニーは「連中」という言葉を正しく理解して、レスキューの波長でサンドラの映像と音声を拾い上げた。
「第一小隊から、救助機動隊司令部へ。アジェンデ最高司令官の指示により、勇敢な英雄に、パレードの先導任務を引き継ぎます」
ウォーデンらは、ちらりと大臣に目をやった。確かに解放軍を預かる大臣はそう言う指示を出していたはずだ。アジェンデは言葉を発せぬまま、無駄になったスピーチ原稿を手の中で握りつぶした。皮肉を演出したわけではないが、サンドラがウインクしつつ後続の艦に投げキッスをする映像がスクリーンに広がった。
「後続の各艦へ。じゃあ、あとは任せたわよ」
ふと、気づいたように発したサンドラの言葉は、仲間に向けたものらしい。
「シャオリー。口を閉じて、その不細工な面をなんとかしな！アンタの間抜けな面が全国放映されるよ」
専用回線を通じて中継艇のハンムルからウォーデンにサンドラの感想が届いた。
「勘のいい女ですね。こちら、中継位置に付きました。ただいまから映像をおくります。とびっきりのヤツです」

　広場のスクリーンの映像はウォーデンの合図でハンムルが捉えた映像に切り替わった。
広大な空間に星々の輝きが見受けられるのだが、それを背景にゆっくりと動きを見せる輝きがあり、たどってゆくと１本の列になる。映像は拡大され、その輝きが大型艦が発する電飾だと知れた。この列をなすのは火星に残る大型艦のほとんど全てで、火星市民の最後の意地の象徴とも言える。その列を先頭に辿ってさらに拡大すると、ちっぽけな３隻の船にたどりつく。その３隻が突如として、後部ノズルから長いプラズマの噴流を吐き出した。３隻は加速し、見事な弧を描いて映像の視界から消えた。映像が何かを求めるように拡大され、その先の３隻を捉えた。軌道修正を終え、エンジンを切って航行する静かな姿である。ただ、３隻はどれも、もとの優美な姿を保ってはいない。船首が破壊され、艇体に穴が空き、放熱板が吹き飛び、白く尾を引いているのは、放熱板が破壊されたために、応急的に艇内の熱を水で排出した水蒸気である。哀れな姿になったものだ。
　ウォーデンはあえてコメントを加えずにこの映像を伝えた。映像を見た火星市民たちにも、これが３日前に報じられた救助機動隊だと言うことは分かるだろう。無駄なコメントを拒絶する絵である。
　ウォーデンが振り返って、ふと目をやれば、広場の中で映像を見る観客の中に拍手を送る者がある。拍手は、歓声と共にゆっくり広がりつつ、広場全体を覆った。
（ほぉ・・・・）
ウォーデンはその光景に感激のため息をつくことしかできない。スクリーンの映像ではない。火星全域に配信された映像は、人々の共感を呼び、あの哀れな姿の船に送る拍手が火星全土に広がっていく。その市民たちの映像に対してである。ウォーデンの冷静さが彼に次の指示を出させた。
「ハンムル、ターゲットを逃すなよ」
「合点だ」
パレードの先頭に併走しつつ、ハンムルはカメラに微細な調整を加え、キャノピー越しに女の素顔を捉え自分の仕事に満足の感想を漏らした。
「ほおっ、、いい女だね。火星の女ってのはこうでなくちゃ」
ハンムルが捕らえたシャオリーの表情が巨大スクリーンに映し出された。挑戦的ではあるが、驕りや高ぶりのない無垢な意思を感じさせる。火星市民は、事件の英雄の姿に静かに沸きあがって、彼女の表情に人類の姿を投影した。
　何やら物音がして事務局に居た人々の興味を引いた。アジェンデ大臣がスピーチの原稿を床に叩きつけて立ち去る物音である。アフマド司令が口ひげを撫でつけ声をかけた。
「この火星市民の一体感と高揚感。さすがに大臣の采配は見事なものですな」
そして小さく付け加えた。
「どうやら、市民はあなたのスピーチより彼女たちを選んだようですな」
ウォーデンはそんな大臣を気にとめるふうもなく、中継機にいるもう一人部下に命じた。
「ウィル、お前も仕事がしたいだろう。隊長のコメントが取れるか」
「やってみます。では、シャオリー・リュー隊長に」
　シャオリーの表情が怪訝な者に変わった。ウィルの通信が繋がって初めて、放送の対象が自分

だと気づかされたのである。
「お伺いします。リューさん、今のお気持ちはいかがですか？」
突然にそう言われても回答を準備していたわけではない。つい、ぽろりと本音を吐いた。
「今？熱いシャワーでも浴びたいね」
シャオリーは人々の視線を避けるように目を伏せた。今の気持ちを言葉で語るすべがない。
ウィルが重ねて聞いた。
「シャワー？」
「そぉ、私たちが生きてるって証拠よ」
　彼女が示唆するものが彼女の視線の先にある。カメラは彼女の視線を追った。眼前に大きく広がる赤い惑星がある。彼女が見ているものを例えて言えば、地球という星で生まれた人という存在が、ずっと変わらぬ目的地を見つめて道を踏みしめているという実感だろうか。

了

あとがき

　ここまで読んでいただいてありがとうございました。
物語は現代から２５０年ばかり未来。火星に進出し、人々は、この大地で子や孫を育みます。しかし、その歴史はけっして安穏としたものではなく、厳しい自然ばかりではなく、テラフォーミングの事故など幾多の危機が彼らを襲います。そんな時、助けを求めるには地球という世界は遠すぎました。彼らは生きてゆくために、地球人類が長い歴史の中で纏った民族・政治・宗教・思想などかなぐり捨てて共存の道を歩まざるをえませんでした。
　そう、彼らはややこしい虚飾をかなぐり捨てて、人類が本来持っている輝きや闇を体現している人々なのです。彼らは私たちに人類の本当の姿を見せてくれるのではないでしょうか。

　この物語の中に、アスカという小型の宇宙船が登場します。火星の中小企業が生存をかけて開発に挑み、火星の人々を巻き込みながら完成させた船です。この物語は、そのアスカという小さな宇宙船を軸に構成した「アスカ物語」というオムニバスドラマの第１９話です。この話を読んでいただいて、その他の物語も読んでみたいと感じていただけたでしょうか。
　最後に、やがて成長してアスカの主任設計者となるパク・ウォルヒの幼少時代の掌編をご覧ください。人々によって人類の思いが引き継がれてゆきます。

******* アスカ物語　プロローグ　火星の息吹　**********

「ざまぁねぇや」
　目の前のカンサイ市の残骸を眺めて、自分の役割を奪われた男はそう思った。本来、この都市は火星の人々の手で設備と技術者が集約され、温室効果ガスの放出を始め、火星の環境をモニターする役割を担っていた。３５０年先だと見積られる大地の上で呼吸する夢を、子供に語って聞かせていたのである。
　対して、連邦政府が推し進めた「火星の息吹計画」は、火星の大地に巨大エネルギーを一気に注いで、１８０年後、孫の時代には素肌で火星の大気を味わっているというふれこみだった。政治家と御用学者の思想は心地よく、火星の人々の意志は抹殺された。この残骸はその結果である。
　男は足の痛みに顔をしかめた。都市の外に居て水や二酸化炭素の濁流の直撃は免れたが、気密服の内側の男の体は損傷を受けていた。右足の膝に力が入らず骨折しているに違いない、呼吸の都度、息が止まりそうになる。肋骨も何本か折れている。しかし、血管に注入した医療用マイクロマシンと麻酔薬は気休め程度の効果はあった。しかし、呼吸が荒く気密服の背後に背負う酸素ボンベの残量が気になった。
　この都市は、居住区の六角柱を手始めに、蜜蜂が勤勉に巣を継ぎ足すように、様々な機能を有する六角柱を継ぎ足しつつ発展した。それぞれの六角柱は緊急時は防護壁で隔離される。都市の外周は被害は被ったが、うまくいけば、与圧が保たれた区画が見つかるかもしれない。いや、そ

うしなければ、男は火星の大地の上で酸素が切れて窒息死は免れないのである。
　男はようやく外壁から突き出した非常用エアロックを見つけた。その側面の窓に彼を眺める幼女の姿があり、何かを叫んでいるが聞こえない。当然である。エアロックのぶ厚い壁と、ほとんど音を伝えることができない希薄な大気が、二人を隔てていた。男は窓に接近し、気密服の指先を窓にふれた。
「お嬢ちゃんは一人かい？」
　男の音声が気密服の指先の振動子を通じて窓を振動させて、中に男の言葉を伝えた。幼女の言葉が窓をわずかに振動させ男の気密服のヘルメットに言葉を届けた。
「お嬢ちゃんじゃない。私の名はウォルヒ。一人じゃないわ。弟と一緒」
　男は黙って幼女が抱く赤子を眺た。赤子の肌に赤みが無く、その顔は凍り付いたように表情が抜け落ちていた。少女の胸と腕が作るゆりかごから零れた赤子の右手は力を感じさせず、だらりとたれていて生命感がなかった。
「おじさんは、誰？私を助けに来てくれたの？」
「おじちゃんは怪我をしている。中に入りたいんだ。ウォルヒは町の中に入りなさい」
　彼女にエアロックの中に居られると、男は外部のドアを開けることができない。しかし、ウォルヒは首を横に振った。
「ドアが開かないの」
　男は悟った。エアロックの周辺の壁は亀裂の破孔が内部から吹き出す空気によって外側を向いている。エアロックの内側の環境は外気と変わりがない。エアロックの安全装置は人が生存できる小さな空間に少女を閉じこめているのである。
（ここまでか）
　まもなく麻酔が切れて痛みで動けなくなる。無理に動けば酸素の消費も高まる。男は観念したように雪のようなドライアイスが覆う地面に腰を下ろして少女に声をかけた。
「パパやママはどうしたの？」
「パパもママもお仕事に行ったの」
「何の仕事？」
「火星を暖かくするの。そうして川や海を作るの」
　なるほど、両親はテラフォーミングの技術者ということか。そう納得する男に少女は尋ねた。
「ねぇ、何が起きたの？」
「地球の人たちが、君のパパやママより上手に仕事をするって出しゃばってきたんだけど、火星が怒っていっぺんにガスや水を吐き出したんだ。そして、人も町も流された」
「おじさんは？」
「おじさんか」
　男は口ごもった。自分の立場をどう説明すればいいのだろう。
（俺か？俺は人類救国戦線の活動家で、）
　政治信条を語れば、『火星の息吹計画』の後、地球の余剰人口を火星に送る棄民政策を阻止するということである。ただ、そんな男を反体制の政治家ども、土木工事の利権に集る企業間の競争、自己顕示欲を露わにする御用学者ども、偏狭な宗教指導者どもが陰で複雑に絡み合って、

この男をバックアップしている。いわば、このテロリストは地球の利権や強欲を濃縮する人物といってもいい。『火星の息吹計画』の成功の最中、基地となる都市の外壁を吹き飛ばして社会に混乱を生じさせる。そのつもりで都市の外で爆破準備をしていたら、政治家どもの方がよほど効率よく都市を壊してくれて、彼も巻き添えを食った。そんなマヌケな状態を説明するすべがなく、考え込みつつ言葉を継いだ。
「俺は君のお父さんの仕事を邪魔をする悪者と戦うためにここへ来た」
「正義の味方ね？」
　ウォルヒの言葉に男は苦笑いした。この状況になってさえ、男は気密服のポケットに都市の外壁を爆破する爆薬と発火装置を持っていた。冷酷で任務に忠実なテロリストの妙な誇りである。少女が不安げに聞いた。
「誰かが、私たちのこと助けに来る？」
「すぐに、救助隊が来るさ」
　それは男の願望に過ぎない。最も近いルナ平原のピッカリング市でさえ２４００ｋｍもの彼方である。しかも、その上空は長期間の砂嵐で覆われてこちらに救援機を飛ばすことはできないはずだった。万が一の事故に備えて、計画を日延べすべきだという火星行政府の提案は、連邦政府によって一笑に付されていた。そんな判断をした連中は、現場から離れた安全な星でこの状況を眺めているに違いない。その地球は遙か隔てられて、この星の人々を救う手段を持たない。
　男は黙ったまま考え続けた。航空機が使えない救援隊は車両で出発しているだろう。あと６日生き延びれば、救出される可能性がある。しかし、男が背負う酸素は残り少なく、あともって１日というところだ。西に傾いた太陽が真珠色の空を紫に変え始めている。その幻想的な美しさと静けさが、死を覚悟した男に考えさせた。
（俺は何のためにこの星にやってきて、何をしているんだろう）
　男はふと思いついて、ポケットにあったペースト状の爆薬を容器から取り出して、傍らの雪に見えるドライアイスと氷を混ぜた。その性状は粘土に近い。粘土遊びに興じているかのような男の姿は、子供じみていて微笑ましくさえある。
　男はふとエアロックを眺めた。都市機能が破壊されているのに、少女が中で生きているのは、非常用の生命維持装置が機能しているに違いない。男は外部メンテナンスのハッチを開けた。期待通り、様々な機器に混じって黒い酸素ボンベがある。ボンベから空調機に繋がるホースのコネクターは男の気密服とも接続できる。
　男は無邪気な子供の表情をテロリストのそれに変えて手順を考えた。電源を断ち切って酸素ボンベのコネクターを抜き、室内の排気バルブを開けば、エアロック内部は急な減圧で少女は気を失うだろう。そしてシェルターの温度は下がり少女は凍死する。それからあの黒い酸素ボンベを奪えばいい。あの酸素があれば俺は数日は命を継ぐことができる。どうせこのままでは救援隊が来るまでに二人とも死ぬ。少女も気を失って死ぬ方が楽だろうと身勝手な理屈である。エアロックの窓の内側で、窓の曇りをぬぐって開けた視界から男に何かを叫んでいた。男は指の震動子を壁面に付けてウォルヒの声を聞き取った。
「おじさん、弟が目を覚まさないの。冷たくなってきたの」

「ウォルヒ、その子は死んだ。神に冥福を祈ろう。その子の名は？」
　ひたむきに小さな骸を抱く少女は、弟を守るために恐怖や不安と戦ってきたのだろう。男はこの勇敢な少女に自分の名を告げていなかったことを思い出した。
「俺はおじさんじゃない。ベン・フェリルそれがおじさんが両親からもらった名だ」
　組織と身分の数だけ偽名を持って生きてきた男が、すべてを脱ぎ捨てて素のままの人間に戻った瞬間である。その一言を機に、男は非常用バッテリーの電源を切り、酸素ボンベのホースのコネクタを抜き、排気バルブを戸惑いもせずに開けた。轟音とともに空気が抜け去ってゆく。中のウォルヒは急激な減圧のショックで気を失った。
　砂嵐の中、数多くの脱落車両を出しながら地を駆けてきた救援車両がカンサイ市にたどり着き始めたのは、事故から４日目の夕刻である。見渡しても、都市そのものなのか、大気に昇華しつつあるドライアイスに包まれた都市の破片なのか区別がつかず、紫の夕空のもとで生存者の救出は困難を極めていた。
　パトロール車がそれと気づかず素通りしようとしたときに、閃光がにわかに人々の目を射た。徒歩で接近した気密服姿の隊員が発見したのは、都市の壁面に描かれた『生存者あり』の文字である。先頭の隊員が背後の仲間に首を横に振った。文字の意味にもかかわらず、壁に寄り添って倒れていた男はすでに凍り付いていて蘇生の可能性はなかった。死体の傍らにある黒い燃えがらが、先ほどの閃光の正体である。車のエンジンの熱源を感知して火薬か何かを発火させたのだろう。そう分析する隊員のヘルメットに、生存者を見つけたという感動がこもった声が響いた。声の主が指さす先に非常用エアロックがあり、中に少女の姿を見つけたのである。男が書いた文字はこの少女のことか。救助隊は周囲の状況から物言わぬ男の行為を理解した。シェルター内の気温を下げて少女を仮死状態にして新陳代謝を下げ、酸素の消費量を抑えた。危険な賭だが少女の生存の可能性は高まると考えたのだろう。酸素の配管には異常はなく、ほとんど空になったボンベから酸素が供給され続けていた。男の気密服から外したバッテリーが、部屋を外気から守る程度に暖めている。死んだ男の表情に悔いはなかった。
　都市は二十数年の年月を経て再建され、今は都市全体が巨大なドームで覆われる構造に変わった。その一角に亡くなった人々の名を記した銘板が納められた碑がある。成長したウォルヒは銘板の名を指で辿りつつ、自分の命を救った誰かを思うのを止めた。誰か一人ではなかった。あの時、この大地の上にいた者がすべてが、最善の努力をし、火星の人々の未来をつないだ。彼女もまたその一員でありたいと思った。

了